「豊浦寺の宴の歌」考

北谷幸册

四季に分けて雑歌と相聞の歌とを収める巻八の、「秋の雑歌」と題するなかに次の三首がある。

故郷の豊浦の寺の尼の私房にして宴する歌三首

明日香川行き廻る岡の秋萩は今日降る雨に散りか過ぎなむ　（巻八―一五五七）

右の一首、丹比真人国人

鶉鳴く古りにし郷の秋萩を思ふ人どち相見つるかも　（巻八―一五五八）

秋萩は盛り過ぐるをいたづらにかざしに挿さず帰りなむとや　（巻八―一五五九）

右の二首、沙弥尼等

小稿では、これらを検討し、私見を述べてみたい。（歌の表記は、小学館古典全集本『萬葉集』に従うこととする。）

一　作歌の周辺

時は、秋萩の花咲く頃、所は、明日香の豊浦の寺である。宴の場となった「尼の私房」（尼の住む私室。金子元臣『萬葉集評釋』は、「本来附属の建物で、尼の住む坊を称した」という。）には、沙弥尼（比丘尼になる前の有髪の

女子の僧。）たちに招待されて丹比真人国人（「真人」は、古代の姓。以下「丹比国人」又は「国人」と記す。）という男がいた。周知のとおり「萩」は萬葉集中最も多く、一四一首もの歌に詠まれている植物である。この折の宴は、咲き盛る秋萩を愛でるものであった。「沙弥尼」と記されている女性についての詳細は不明であるが、客人の丹比国人（生没年未詳。）は『続日本紀』の記すところによれば、天平八年（七三六）従五位下、天平宝字元年（七五七）七月に橘奈良麻呂（七二一～七五七）の謀反に連座して伊豆に流されている。[1] 集中には冒頭の作を含めて、長歌一首・短歌三首がみえる。作歌の年代を土屋文明氏は、三首の前後に収載する歌の順序からみて「天平五年乃至八年の作なるべし」[2]という。世は、聖武天皇（在位七二四～七四八）の御代であった。この頃丹比国人は、役人として寺の事に関わり奈良から出向していたかと思われる。平城遷都（七一〇年）の後の飛鳥・藤原の地をさして「故郷」と呼んでいるが、[3] これらの三首が詠まれているのは、古京飛鳥のわが国最初の尼寺「豊浦寺」の房舎においてである。寺は今日甘檀丘と呼ぶ丘の北東麓に当る豊浦の地に、蘇我稲目が自邸を喜捨して向原寺と称し、その跡地に推古天皇（五九三～六二八）の豊浦宮が営まれ、後にその地に建てられたものであることを伝えている。[4]

二　行き廻る岡

一五五七番歌の第二句は、古写本に「逝廻岳」（西本願寺本）・「逝回丘」（類聚古集・神田本）などとあり、訓みについても、

ユキ、ノヲカ　代匠記・萬葉考・拾穂抄・略解
ユキタムヲカ　古義・略解（宣長説）・井上新考・金子評釋・窪田評釋・折口口訳
ユキミルヲカ　全註釋・注釋・岩波古典大系・旺文社文庫本・講談社全訳注原文付本・小学館古典全集本・新潮社古典

集成本
ユキワノヲカ　童蒙抄
ユキメグルヲカ　私注

などと訓む説がある。今は、巻三―三五七に「榜廻舟者」とある訓をコギミルフネハと改めた『全註釋』[5]に従ってユキミルヲカと訓み、固有名詞とはみない諸注に従うことにする。[6] ユキミルヲカとは、明日香川がめぐって流れている丘の意である。

明日香の地を北西にむかって流れて来た明日香川は大字飛鳥の辺りから甘橿丘の麓を西流し、雷丘（明日香村大字雷）の西麓を再び北西に向かう。地形からみれば、川は甘橿丘と雷丘との両方をめぐって流れていることになる。ユキミルヲカと呼んでいる丘については、甘橿丘説・雷丘説さらに岡寺付近説や非地名説があるが、『大和志考』（奥野健治）にも言う、甘橿丘を指しているのではなかろうか。その麓に、今宴の場となっている豊浦の寺があり、庭には「秋萩」が咲き盛っている。続く二首にも共通して「秋萩」の語が詠み込まれているが、いったいに花見は花の近くに寄ってのもの、ことに萩などはしだれる枝を掌に載せてでも賞美するというのが自然であろう。一座の人々は、豊浦の川向こうにある雷丘の萩の花見をしているのでも、想像して詠んでいるのでもない。この一首は「明日香川の明日と、秋雨の降る今日とを響きあわせながら、「今日降る雨で散ってしまうことだろうか」と、目のあたりの萩に心寄せているのである。

三　鶉鳴く古郷

一五五八番歌は、主人の側から客の歌に和えたものである。「鶉」は、古びた草深い所に住むところから、「鶉鳴

く」を枕詞として、ここでは「古りにし郷」に続けている。「鶉鳴く故りにし郷ゆ思へどもなにそも妹に逢ふよしもなき」（四―七七五・大伴家持）・「人言を繁みと君を鶉鳴く人の古家に語らひて遣りつ」（十一―二七九九・作者未詳）なども同様に、人が住まなくなって古びた里や家を表わすのに「鶉鳴く」と言っている。[7]「思ふどち」は、気の合う者同士の意。『代匠記』精撰本は、「中ヨクテ相思人トチナリ」と言う。平素は明日香と奈良とに離れ住んではいるが、ごく親しい関係にある人たちであろうことが、この語から窺える。

沙弥尼の作になるこの一首は、みずからの住まう所を「鶉鳴く古りにし郷」とへりくだって言いながら、客と共に秋萩を賞翫することの喜びを歌っている。「鶉」と「萩」とのとりあわせは集中この作以外にはみえないが、珍しい取り合わせが一つの情景をかもし出している。

四　秋萩は盛り過ぐるを

一連の最後に位置する沙弥尼の歌（一五五九）は、先に歌意をとれば「秋萩は盛りを過ぎようとしているのに、髪にも挿さないでむなしく帰っておしまいになるのですか」と、客を引き留めようとしている一首である。サカリは、ここでは「花が満開であること」を言うが、人の旺盛な様をもいうこと、「日下江の入江の蓮花蓮身の佐加理人羨しきろかも」（「雄略記」）との『古事記』の歌謡からも窺える。また、大伴家持が娘に求婚してきた藤原久須麻呂に贈った歌、「春の雨はいやしき降るに梅の花いまだ咲かなくいと若みかも」（四―七八六）では、サカリとは逆に梅の蕾にたとえて、娘がまだ成長しきっていないからと断っている。さらに、集中の萩を詠み込む歌一四一首の中の「我がやどに植ゑ生ほしたる秋萩を誰か標刺す我に知らえず」（十―二一一四）・「見まく欲り恋ひつつ待ちし秋萩は花のみ咲きて成らずかもあらむ」（七―一三六四）は、いずれも秋萩を女性に譬えている。四句目のカザスについては、

萩に関わる歌に「春されば霞隠りて見えざりし秋萩咲きぬ折りてかざさむ」（十―二一〇五）ともあるように、花や木の枝を手折って髪に挿すことであるが、「高円の秋野の上のなでしこが花うら若み人のかざしなでしこが花」（八―一六一〇・丹生女王）との歌に見える「なでしこの花」が丹生女王みずからの譬えであるとすれば、カザスは男女の交わりをさすとも考えられる。女性に譬えられる「をみなへし」（女郎花）や「なでしこ」（撫子）が音から女性を連想するように、「萩」は「芽子」と書く表記から女性を連想したものであろう、との吉永登氏の論[8]がある。

これらの事例を考えあわせてみて、沙弥尼のこの作の「秋萩は盛り過ぐるを」は、作者自身を譬えたものであろうと思われる。さらに、沙弥尼のこの歌は、作者の期待に背いて帰って行こうとする国人を引き留め、男女の関係を意図して誘いかけている一首であると解したい。結句にかかる第三句目のイタズラニも、ただ「空しく」というだけではなく、「（私と）何もしないで」の意を込めていると解することができる。思わせ振りな歌を寄こした国人を揶揄している趣の一首である。

五　再び国人の歌、そして結び

ここで再び、さきの丹比国人の作（一五五七）を見れば、国人の歌にいう「秋萩」も招待者である沙弥尼を譬えたもの、「散りか過ぎなむ」は、沙弥尼の歌（一五五九）の「盛り過ぐるを」と同様に「女盛り」ということを意識しているものと思われる。井上通泰『新考』は、「比丘尼が男子を引きて私房にて宴せしだにあるに沙弥尼をしてかゝる歌をよましめしはあさましともあさまし。当時の僧尼は一般にいたく堕落したりけむかし」と言って憤慨している。また、小学館古典全集本にも引く「僧尼令」では、僧尼の房に異性が同宿することを禁じているが[9]、これらの作が宴の場での座興であってみれば、それほど深刻な思いを歌ったものではなかったろう。同じ明日香の、橘寺を舞台にし

た歌に、「橘の寺の長屋に我が率寝し童女放りは髪上げつらむか」（十六―三八二二）との猥らな感じのする一首もある。また、女性からの男への誘い歌であると思われるものに東歌の「足柄の和乎可鶏山のかづの木の我をかづさねもかづさかずとも」（十四―三四三二）・「奥山の真木の板戸をとどとして我が開かむに入り来て寝さね」（十四―三四六七）[10]がある。みずからを「秋萩は盛りを過ぐるを」と歌う沙弥尼の歌の二句目は、国人の作の「散りか過ぎなむ」と相呼応している。そして、おそらくは同席している別の沙弥尼の作であろう一五五八番歌は、二人のやりとり歌の間をとりもつ形で二人の歌の間に置かれている。国人の秋萩を惜しむ挨拶歌は、いささか辛辣な形で尼への思いを詠んだ誘いかけの歌であり、沙弥尼からの引き留めの歌も酒宴の場での座興なればこその諧謔であった。

儀礼的な宴席歌の形式を説いて土橋寛氏は、宴の歌では初めに主人（または尊貴な賓客）を寿ぐ客人（または主人）の祝歌があり、それに答える主人の歌、次いで参会者の歌、最後に主人側の送り歌（引き留め歌）と客人側の立歌とが歌われるというパターンがあることを論じておられる。[11] 例えば巻十九に「打ち羽振き鶏は鳴くともかくばかり降り敷く雪に君いまさめやも」（四二三三）とあるのは宴楽の終わりに主人内蔵忌寸縄麻呂が客人である大伴家持を引き留めている形の一首。これに家持は「鳴く鶏はいやしき鳴けど降る雪の千重に積めこそ我が立ちかてね」（十九―四二三四）と和えている。

ひるがえって再度今の豊浦寺での宴の歌についてみれば、一連の作は形の上からも、作者の意図するところからも、儀礼的な宴歌のパターンがとられているわけではない。尼の私房に集う人たちの間柄は、一見辛辣とも思われる諧謔が通るほどに親密なものであったのだろう。以上、宴の歌であるが故に「雑歌」に分類されていて、従来は萩を賞美する挨拶歌、秋萩を詠み込む当座の引き留めの歌として解されてきた冒頭の三首は、親密な間柄にあるからこその諧謔の歌であろうということを繰り返して、この小考の結びとする。

注

（1）『続日本紀』天平宝字元年七月条に「使を遣して遠江の守多治比の国人を追召して勘問す。欺す所亦同じ。伊豆国に配流せらる。」とある。

（2）『萬葉集年表』第二版（岩波書店）

（3）例えば、「大伴坂上郎女の、元興寺の里を詠ふ歌一首」、

故郷の飛鳥はあれどあをによし奈良の明日香を見らくし良しも　（巻六―九九二）

がある。

（4）『元興寺伽藍縁起並流記資財帳』・『日本書紀』など。『日本書紀』欽明天皇十三年十月条に「向原の家を浄め拾ひて寺とす。」とある。また、『大和志』には「広厳寺。在三豊浦村。旧作三向原。」と記す。もと向原寺と言い、後に音をあてて広厳寺と称した。後の豊浦寺である。

（5）三―三五七は、「縄の浦ゆそがひに見ゆる沖つ島榜廻舟者釣りしすらしも」。「榜廻舟者」を注する『全註釋』は、有坂秀世（『国語音韻史の研究』）の「加岐微流」（古事記六）のミルを「廻る」の義とする説を引き、併せて「廻」をタムと訓めば「連体形はタムルであるから、ここもコギタムルと読まねばならなくなり、それでは調子が悪くなる。」と説いている。

（6）『大和志考』（奥野健治）の「ゆきたむをか（逝回岳）」の項に、「地名にあらず。地名類字『逝回岳。仙覚抄、岡寺同所也』、大和志『逝回丘、在岡飛鳥二村間』等地名とせるは誤れり。只、飛鳥川が行廻れる岡の意なり。此岡は何処に当るや、古来説多し。……（中略）……現今甘橿岡と称へらるるものも其一とすべし。」と説く。

（7）集中「鵜」を詠み込む歌には、二―一九九、三―二三九、四―七七五、八―一五五八、十一―二七九九、十六―三八八七、十七―三九二〇の七首がある。

（8）「秋萩の恋」（『万葉―その探究』所収。〈現代創造社〉）

（9）「僧尼令」に、「凡そ寺の僧房に婦女を停め、尼房に男夫を停めて、一宿以上経たらば、其の所由の人、十日苦使。五日以上ならば、卅日苦使。十日以上ならば、百日苦使。」（日本思想大系『律令』）とある。

（10）三四三二の、カヅスは「かどわかす・誘拐するの意か」。三四六七の、トドは「擬声語。戸をたたく音や、馬の足音を表わす。」（『時代別国語大辞典上代編』）

(11) 「万葉創作歌の性格」(『万葉開眼』上 〈日本放送協会〉)